

オホーツクの町



美幌医師会

美幌町立国民健康保険病院

まつ い ひろ すけ
松 井 寛 輔

私の住む美幌町はオホーツク管内にあります。言うまでもなくオホーツク海に面した地域なのでこう呼ばれているわけですが、なぜ日本の領土にロシア語の名前がついているのか。今でこそすっかり私もこの呼称に慣れてしまいましたが、美幌へ移住した当初は強い違和感を覚えました。そもそもオホーツク海の名称は、この海の北端にあるロシアのオホーツクという小さな町の名前に由来しているのですが、そんな小さな町の名がなぜ世界中に知れ渡る海の名称としてつけられることになったのでしょうか。

私がロシアにあるオホーツクの町を知ったのは、吉村昭氏の著書「北天の星」でした。この作品は、中川五郎治という実在した人物をもとに書かれた小説です。江戸時代の1807年、択捉（エトロフ）の番屋にいた日本人の主人公がロシア人に捕らえられオホーツクの町に連行されます。彼は5年もの間、寒さの厳しいこの町で生き延び最後は北海道に戻ることができたのですが、帰国時にロシア語で書かれた種痘の本を北海道へ持ち帰り、これにより日本で初めての種痘が実施されることとなります。それ以前にも、船の難破で漂流しカムチャッカ半島やアリューシャン列島へ辿り着いた日本人がいました。彼らは土着民に捕えられますがロシア人に引き取られ、そして先に述べたオホーツクの町へ送られ、さらにはヤクーツクや、ペテルブルク（現在のサンクトペテルブルク）にまで移送されます。1696年に漂着した伝兵衛という人を筆頭に、1710年のサニマ、1729年のゴンザとソウザ、1745年のイガチ、1783年の大黒屋光太夫などの人々がそうです。大黒屋光太夫については、この人物を題材にした井上靖の著書「おろしや国酔夢譚」があります。このように17世紀頃から、オホーツクという町には何人もの日本人が住んでいたことがあったのです。では、ロシアのオホーツクはどのような町だったのでしょうか。

ロシアのシベリア征服は、シベリアの名前の由来とされるモンゴル末裔の国家シビル・ハン国を滅ぼしたことに始まります。当時、ロシア軍はいくつかの民族と激しい戦いをしながら東へと拡大していきました。驚くべきことに、ロシア軍は広大なシベリア大陸をたったの60年ほどで征服し、1639年には、遂にオホーツクの海に達します。そして、1647年にオホータ川の河口にオホーツクという名の町を作りました。町の名前はオホータ川の名から来たもので、現地の先住民の言葉で「狩をする所」を意味

するようです。やがて、ロシア皇帝の命によりこの町に造船所が造られ、18世紀頃には、町はオホーツク海やカムチャッカ半島地域の交易の中心地となり、この地域で採れる貂（テン）をはじめとする獣皮が全てオホーツクの町に集められていました。また、1728年にベーリングがベーリング海峡を発見した時も、船はこのオホーツクの町で建造され出航しています。また、ロシアの太平洋艦隊もここから始まりました。このように、オホーツクは町として決して大きくはなかったものの、ロシア極東開拓の拠点として非常に重要な役割を果たしたのです。

オホーツクの町を流れる川の河口はサロマ湖のような汽水湖で両側から砂州が伸びています。昔は河口の西側に町が作られていたのですが、現在は河口の東側に移転しています。昔の西側の砂州には現在も先端に半円形の砂州が突出しており、ここが昔、港として使用されたところです。町は近傍を含めると人口が3万9千台に増加したこともありましたが、しかし、その後ロシアは清から沿海州を勝ち取り、そこにウラジオストックの町を作りました。ウラジオストックは待望の不凍港として栄え、一方、オホーツクの町は衰退していき、2010年には町の人口が4,200人にまで減少してしまったようです。

さて、北海道のオホーツクに話を戻します。北海道の行政上の区分で、オホーツク海に面した3市14町1村の地域の支庁名がオホーツク総合振興局と改称されたのは2010年4月1日のことです。それまでは網走支庁と呼ばれていました。北海道の人なら当然ご存じでしょうが、恥ずかしながら私はつい最近まで知りませんでした。この地域最大の都市が北見市なのに、なぜ網走支庁なのかと問題視する意見があったのでしょうか。話し合いの結果、オホーツクの名称に決定したようです。ロシアによるウクライナ侵攻後、あるロシアの政治家が、北海道もロシアの領土だと言ったとかいう話も聞きますが、「オホーツク管内」と聞いて世界の人たちは北海道の一部がロシア領だと誤解しないか心配になります。「狩りをする所」を意味するロシア語の「オホーツク」の名はついていますが、「オホーツク管内」は間違いなく日本国内の地域であること、そして、人を狩るような戦争とは無縁の平和な地域であり、「友好の意味でロシア語を用いた」ということをロシアの人々が理解してくれることを願います。